

関西菌類談話会会報

1993年12月 No. 14



目 次

表紙 [チャヒメオニタケ]	田中 千尋	1
四国でのクモタケ <i>Isaria atypicola</i> Yasuda の分布	佐野 修治	2
北アメリカにもバカマツタケがある	小原 弘之	5
最近採集した比較的稀なきのこについて	塚田 哲丸	6
国際東洋医学会における霊芝の研究	奥沢 康正	8
セミタケのホストは?	杉山 信夫	10
1993年度活動の記録 (上半期)	事務局	10
きのこ西東	山手万知子	15
事務局より, 表紙によせて, など		15, 16

四国でのクモタケ *Isaria atypicola* Yasuda の分布

佐野修治

1991年2月2日の関西菌類談話会第283回例会における上田俊穂氏の「クモタケの分布」についての発表で、四国地方にはクモタケの発生の報告がない事を知った。それ以来、徳島、愛媛、香川、高知の各県を、延べ124回にわたって調査しクモタケおよび、その寄主であるトタテグモ類の営巣地の発見に努めた(表1, 図4)。

その結果、徳島県徳島市(1992年7月6日)、愛媛県新居浜市(1993年6月9日)、香川県高松市(1993年7月6日)の3ヵ所でクモタケの発生が確認できた。また、1993年上記の場所でトタテグモを採集し、その同定をクモ類研究家の西川喜朗氏に依頼したところ、すべてキシノウエトタテグモ(*Latouchia typica* Kishida)である事が判明した。トタテグモ類の分布調査はまだ不十分なので、クモタケの存在の確認はトタテグモ属の分布にも重要な知見を提供するものと思われる。

1) 徳島県のクモタケ

1992年7月6日、徳島県城山公園にてクモタケの大量発生を確認した。これは筆者の知る限りでは四国で最初の発見である。確認した個体数は184であったが、立ち入り不可能で数えられない場所もあり、おそらく約300個体は発生していたであろう。発生場所の概要は、シラカシ・アラカシ・サクラ類・エノキ・クスノキ・ネズミモチ・マサキ・ツツジ類・サツキ・クスドイゲ等よりなる林内の、岩が積み重なっているところ、石垣、コケ類の生えている山肌などである。(図1)

城山公園は市街地の中にかぶ島状の丘陵地公

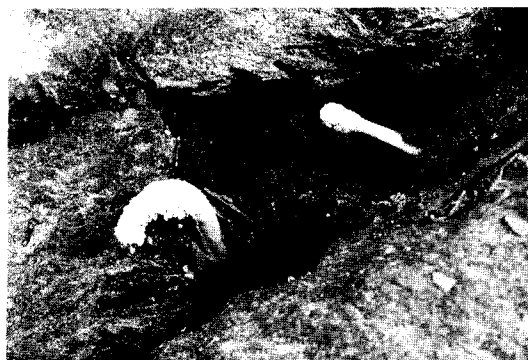


図1 クモタケ(1992年7月23日)

園で、植生は主として二次林であり、一部に原生照葉樹林が残されている。現在では、県が原生林保護対策として、林内に雨水が滞留し、湿潤な状態が保たれるようにされている。

1993年6月24日、同じ場所で再度クモタケの発生を確認し、また、同公園内の新たな発生場所も発見した。

2) 愛媛県のクモタケ

1993年6月9日、新居浜市滝の宮公園で、クモタケ1個体を確認した。(図2)これは同年5月7日に確認していた巣穴で、その直径を測定するためにペンライトで内部を照らしたところ、巣穴

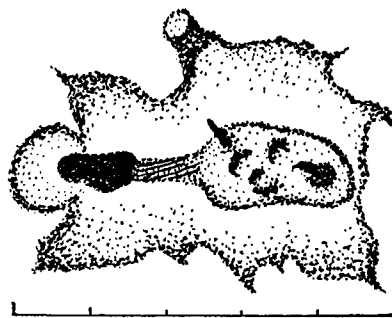


図2 新居浜市、滝の宮公園のクモタケ幼菌、(1993年6月9日)巣を切り開き、中のクモタケが見えるようにしたもの。スケールは1目盛1cm。

内にクモタケの幼菌を発見したものである。同6月25日には、公園のほぼ全域にクモタケの発生を見た。おそらく500個体以上はあるものと推定された。

発生場所は公園の池の周囲の裸地、コケ類におおわれた山肌、山麓の遊歩道沿い、石段、石垣の隙間などであった。発生地の主な樹種はアカマツ・クスノキ・アラカシ・カエデ・ヒサカキ・ヒラドツツジ・シダレヤナギ・ソメイヨシノなどであった。

滝の宮公園は、市街地の西方にあるなだらかな金子山丘陵地にあり、その山頂には金子備後守元宅の居城跡や古墳などの文化財、その他の施設がある。春には桜の名所となる。

3) 香川県のクモタケ

1993年7月6日、高松市栗林公園にてクモタケを2個体発見した。その内1個体を採集し、徳島

県、愛媛県のクモタケと同様、吉見昭一氏に同定を依頼した。発生場所は、紫雲山山麓の斜面で、裸地あるいはコケ類に覆われており、その下部には一部を石積みにした溝があり、雨上がりには、山肌からしみだした水がトタテグモの営巣地を濡らしていた。その後、7月21日に再度訪れ、キシノウエトタテグモの集団営巣地をくまなく観察したがクモタケは発見できなかった。これは観察した日が、クモタケの発生時期と合致しなかったためであろう。

発生場所の優先樹種はアラカシ・ソメイヨシノ・アカマツ・ハナミズキ・ヒラドツツジ・コジイ・クスノキ・ウバメガシ・マテバシイ・クロマツなどであった。この公園は高松藩主松平が残した名園で、紫雲山を背景に6個の池と13個の築山がある池泉回遊式の大名庭園である。

4) 高知県

四国の残る1県、高知県では1991年10月23日から1993年7月20日まで、20回にわたる調査をしているが、クモタケもトタテグモも未発見である。表1の高知県内の観察地点は、環境条件から見てキシノウエトタテグモの棲息、クモタケの発生には十分と思われるが、未発見の理由として；(1)クモタケ発生期と観察時期の不一致、(2)観察地点の選択まちがいが、(3)高知県には分布していない、等が考えられる。(3)を結論とするにはまだ調査が不十分なので、観察の密度を上げるなど、(1)、(2)を再検討してみる必要がある。

5) クモタケの発見方法について

クモタケの子実体は、主に梅雨期から夏(時には初秋)にかけて発生し、3～4日あるいはもっと短期間に萎凋、腐敗消失する。しかし、寄主の

表1 四国でのクモタケ分布調査の結果

場 所	日 付	調査回数	キシノウエトタテグモ*	クモタケ*
徳島県徳島市眉山 同 上	1991. 3.20~10.24	2	未 確 認	未 確 認
	1993. 4.8	1	未 確 認	未 確 認
徳島市城山公園 同 上 同 上	1991. 8.16~10.29	3	未 確 認	未 確 認
	1992. 2.21~12.9	8	未 確 認	7.6①, 7.23
	1993. 1.6 ~ 7.21	7	4.8, 4.19	6.24, 7.21
愛媛県松山市松山城 同 上 同 上	1991. 4.9	1	未 確 認	未 確 認
	1992. 7.13~11.24	3	未 確 認	未 確 認
	1993. 5.20~ 7.22	3	未 確 認	未 確 認
松山市堀ノ内公園 同 上	1992. 2.4 ~12.22	7	未 確 認	未 確 認
	1993. 1.25~ 7.9	5	未 確 認	未 確 認
松山市東雲神社 同 上	1992. 7.13~11.23	2	未 確 認	未 確 認
	1993. 5.20~ 7.22	3	未 確 認	未 確 認
愛媛県今治市別宮大山祇神社 同 上 同 上	1991. 7.15	1	未 確 認	未 確 認
	1992. 7.21~12.11	2	未 確 認	未 確 認
	1993. 2.16~ 6.11	2	未 確 認	未 確 認
今治市今治城 同 上	1992.12.11	1	未 確 認	未 確 認
	1993. 5.20	1	未 確 認	未 確 認
愛媛県新居浜市滝の宮公園	1993. 5.21~ 7.22	4	5.21, 6.9	6.9②, 6.25 (7.22消失)
新居浜市慈眼寺	1993. 5.21	1	未 確 認	未 確 認
香川県高松市玉藻公園 同 上 同 上	1991. 3.20~11.25	8	未 確 認	未 確 認
	1992. 2.18~12.8	18	未 確 認	未 確 認
	1993. 1.27~ 7.6	8	5.19, 6.11, 7.6	未 確 認
香川県高松市栗林公園 同 上	1992. 7.22~12.9	6	未 確 認	未 確 認
	1993. 2.17~ 7.21	7	5.7, 5.19	7.6③, (7.21消失)
高知県高知市高知城 同 上 同 上	1991.10.23	1	未 確 認	未 確 認
	1992. 4.6 ~ 7.24	6	未 確 認	未 確 認
	1993. 1.5 ~ 7.20	6	未 確 認	未 確 認
高知市筆山公園	1993. 6.21~ 7.20	3	未 確 認	未 確 認
高知市潮江天満宮	1993. 6.21~ 7.5	2	未 確 認	未 確 認
高知市五台山 (竹林寺, 牧野植物園)	1993. 7.20	1	未 確 認	未 確 認
高知市土佐神社	1993. 7.20	1	未 確 認	未 確 認

*数字は確認した日付を表す。クモタケの標本番号：① No. 20706-1, ② No. 30609-2, ③ No. 30706-3

トタテグモの巣を発見する事は、クモタケ発生期以外でも十分可能なので、その事にも力を注いだ。とくに、カ（蚊）のいない時期には落ち着いて巣の発見に集中できる。また、トタテグモの巣の発見は馴ればそれほど困難ではないので、クモタケの発生期以外にも営巣場所を確認しておけばクモタケを見つけやすく、また、寄主トタテグモの種の同定にも役立つ。

キシノウエトタテグモの巣(図3)は、丸い「片開きの蓋(ふた)」のついた、斜あるいは横向きの深さ数cmのやや屈曲した行き止まりの穴である。蓋には土やコケ類が付着し、非常に分りにくい、集中し、かつ馴れると丸い蓋が見えてくるものである。(四国各地で測定した蓋の長径は2~24.5mmであった)。そこでクモタケ発生期以外は、キシノウエトタテグモの巣穴の位置を調査しておく事により、クモタケの発見は非常に短時間に無駄なく行え、極めて能率的である。実際、愛媛県、香川県ではこの方法で的確にクモタケを発見できた。

これからもクモタケの探索を通じて、自然界の全ての生き物の営みを、壊す事のないよう心して



図3 キシノウエトタテグモとその巣。徳島市城山公園(1993年7月21日)

続けて行こうと思う。

この調査にあたって、樹木の同定は自然観察指導員高木俊夫氏、クモの同定には追手門学院大学西川喜朗氏のお世話になった。厚く御礼申し上げます。また、貴重な資料の提供と快くご指導頂いた吉見昭一氏、上田俊穂氏に深く感謝申し上げます。

(〒602 京都市上京区千本通り出水下る

西陣グランドハイツ 304)

図4 中国・四国地域のクモタケとキシノウエトタテグモの分布

- : クモタケの発見地, ●: キシノウエトタテグモの発見地,
- : 両者の未発見地。

数字と曲線は2月の平均気温が4°Cの等温線
表1の調査結果を上田俊穂氏の研究レポート「クモタケ (*Isaria atypicola* Yasuda) の分布(予報)」日本菌学会ニュース15号(1990)の地図を改写し、それに加筆図示したものである。



北アメリカにもバカマツタケがある

小原 弘 之

日本におけるバカマツタケ発見劇の舞台には、浜田稔、倉石衍および成田伝蔵の三名の役者が登場する。浜田稔氏の下でマツタケモドキの研究をしていた倉石氏が東北大学に赴任し、東北地方のマツタケモドキを調査していた。成田氏（当時青森県立五所川原高校の教師であった）が倉石氏に類似のキノコを籠一ぱい採集したことがあると伝える。土地ではバカマツタケと呼んでいるとのことであった。しかし、三人が話し合った結果、どうもマツタケモドキではないらしいことが判明した。即ち、先ず、発生は松林ではなく、コナラ、ミズナラを中心として広葉樹の林である。第二に、マツタケ特有の香りがあるらしい（マツタケモドキには香りはない）。そして、食べると美味であることである（マツタケモドキはお世辞にも美味とは言えず、しかも煮ると黒くなる性質がある）。結局、倉石氏は1951年9月に本格的調査を開始する。一方、浜田氏は京都府下で同様なキノコがないか情報の収集を始める。不思議なもので、人間は、同じような時期に同じようなことを考えるらしく、期せずして、マツタケ臭のある近縁種が京都府下の天田郡菟原や船井郡瑞穂町梅田のコナラ林で見つかった。土地の人は以前からニタリと称して、秋に食用としていることが解った。浜田氏の話によると、本郷次雄氏が描いたニタリも、小林義雄氏が描いたバカマツタケも画にしてしまうと「全くマツタケ」であったという程、当時の“バカマツタケ”、“ニタリ”はマツタケそっくりであったそうである。その後、本郷氏*が正式に、この両者をバカマツタケと命名して一件落着となった。

さて、その本郷氏の記載によると、バカマツタケの特徴は「広葉樹林に発生し、マツタケと類似の香りがあり、幾分小形の子実体を形成する。胞子は広楕円形、平滑で非アミロイドである。」最も重要な特徴は「ヒダの縁部に糸状の縁シスチアが密生して不実帯をなしていること」である。

私は、北米大陸に分布するマツタケ近縁種の研究のため、長期・短期の滞在を含めて十二回の訪米を続けているが、その間、常に北米におけるバカマツタケの存在に注意を払って来た。1985年から1986年にかけての滞米中にその存在が確認でき

た。ただし、それ以前、1975年に Washington 州の Ellensburg にある Central Washington 大学の Dr. D. R. Hosford のスライドのファイルの中で私は同種を見つけていたのである。その一枚のスライドは、彼が Michigan Univ. の同業者から譲り受けたもので、*Quercus*（日本ではコナラ属）の落葉が一面に敷きつめられたその上に傘の上部が茶褐色で周辺が白黄色を帯びた一見、謂ゆる“ニタリ”に酷似したキノコが写っていた。私は直観的にバカマツタケであると思ったが、如何せん、スライドでは臭いが解らない。Hosford 氏もその点は確認しておらず、*Armillaria caligata* と北米では呼ばれているとのことであった。このことが長い間、頭の中から離れず、1985年になってしまった。私は北米各地の菌学者に上記の写真と特徴を送りアンケートを求めた結果、3名の菌学者から乾燥標本を含む資料の提供を受けた。いずれも米国北東部の *Quercus* を主とする林で採集したもので、香りが確認できた。しかし、いずれの場合も発生頻度が低く、私自身は発生地を確認していない。ただ乾燥標本から得られた顕微鏡的データは、本郷氏の記載と極めて類似しており、バカマツタケと位置づけても誤りはないものと考えている。北米で刊行されているキノコ図鑑には、*Armillaria ponderosa*（アメリカマツタケ）、*A. caligata*、*A. zelleri* の三種が記載されているが、*A. caligata* については発生頻度が低いいためか、必しも正確に記載されているとは言えない。日本人の私達一というよりマツタケ近縁種を研究している私達と言うべきだろう—が払う程の注意力を払っていないし、彼等にとっては、正に one of mushrooms である。著名な菌学者の図鑑ですら *A. caligata* については針葉樹林に発生するもの、広葉樹林に発生するもの、すべて一括して扱われているので要注意である。さて、残念ながら、発生地で菌根の観察やシロ構造の解析、微生物相の調査など基本的な調査ができていないので、正式な発表には至っていないが、「アメリカにもバカマツタケがある」ことだけは確かである。

(〒602 京都市上京区今出川通り)

同志社女子大学 生物学教室)

* 本郷次雄 (1974): 植物研究雑誌. 49(10). 294.

最近採集した比較的稀なきのこについて

塚田 哲丸

森に入ると、たくさん名前がわからないきのこに出会います。「当然名前があるはずなんだが?」と思われるきのこに出会うと、5年程前から記録しておくようになりました。シーズンオフの暇つぶしに調べてみようということで乾燥標本をつくり、スケッチや顕微鏡観察もするようになりました。しかし、冬になればきのこのことは頭から消え、貴重な?標本も単なるコレクションに終わることの方が多くなります。

そんなコレクションの中に比較的稀なきのこがあったので紹介したいと思います。

① フタイロベニタケ

Russula viridi-rubrolimbata Ying

1992年8月23日、信州きのこの会採集会の折に戸隠高原の森林植物園で会員が採集したものです。このきのこは1952年7月に本郷先生が大津市の茶臼山にて採集し、アイタケの新品種(*Russula virescens* (Zanted.) Fr. f. *erythrocephala* Hongo)として報告されたものと同種です。

肉眼的特徴

傘：直径50-110mm、はじめ不定形の丸山形、のちに中央部の凹んだ扁平形になる。幼菌では汚草色。成長にしたがって傘の表皮がひび割れ、周辺部より血紅色～小豆色に変色していく。成菌では全体に血紅色～小豆色のかさぶた状表皮になる。凹んだ中央部は汚草色で、血紅色のかさぶた斑、周辺部は血紅色の地に小豆色のかさぶた斑となる。傘の縁部はひび割れて切れこみが入る。肉は充実しており白色。辛味及び、変色性はない。

ひだ：柄に離生し幼菌では白色、成菌では白桃色で、縁はなめらか。幅は約86mm、長さ42-45mm。変色性はない。

柄：白色。長さ55-80mm。径は柄の上部で15-25mm、下部で17-27mm。上下ほぼ同大で円柱状。表面は平滑であるが、ツチカブリに似たうねりがみられる。肉は白色で充実。変色性はない。

顕微鏡的特徴

孢子：球に近い楕円形、7.5-8×5.8-6.9 μ m

担子器：紡錘形で35×5.8-9 μ m、4孢子をつける。

縁シスチジア：棒状で30-43×8.6-10 μ m

側シスチジア：棍棒状で42-68×8.6-11.5 μ m

柄シスチジア：棒状で38-50×9.2-10.3 μ m

試薬による呈色反応

KOH：傘は桃色を帯びた肌色（5分後）、柄は淡い蜂蜜色

H₂SO₄：傘は桃色を帯びた肌色

FeSO₄：ひだは桃色を帯びた肌色、柄は黒色（5分後）から赤褐色（20分後）

フェノール：傘は紫褐色

グアヤク脂：傘・ひだ・肉は焦茶色から濃青色（20分後）、柄は濃青色

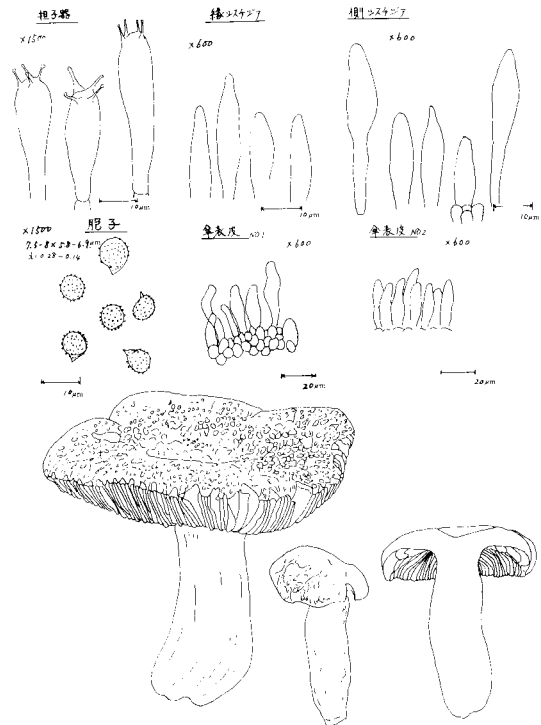


図1

② ツバヒラタケ

Pleurotus dryinus (Pers.: Fr.) Kummer

原色日本新菌類図鑑(1) p. 26に (Imai 1938; 伊藤 1959)として記載されているきのこです。欧米の文献によるとヨーロッパ・北米・アジア・オーストラリアの広い地域に分布している一般的なきのこのようですが、日本では過去に奈良県・栃木県・北海道で採集されているだけですから極めて稀なきのこではないかと思えます。山中勝次氏は奈良県でケヤキに発生していたツバヒラタケを

採集し、同菌の培養に関して菌学会で発表されています。氏によれば、この菌は培養すると異なる厚膜胞子をつくるそうです。採集場所は標高約2000 m、コメツガの生木上でした。

肉眼的特徴

傘：40-150 mm，凸レンズ形から扁平のヒラタケ形に開く。幼菌では白色，香色から成菌では灰褐色となる。表面は香色～淡黄褐色の繊維毛に被われる。成菌になるにつれて表皮の所々がひび割れてはげ上がり白色の実質が露出する。中央部はとくにうろこ状及びかさぶた状になる。縁部は成菌になっても内側に巻き込み，幼菌では縁から脱落しやすい膜片が下がっている。肉は白色で弾力に富み充実している。無味・無臭（わずかに類松脂臭）。

ひだ：幼菌では白色，のちにクリーム色になる。柄に深く垂生する。

柄：20-120×10-40 mm。上下同大か，下部の細まる逆円錐形。白色～クリーム色で表面に綿毛状の繊維毛が見られる。幼菌では柄の上部に薄い膜状のツバがみられるが，消失しやすい。肉は白色で緻密。変色性はない。

発生：コナラ属，ニレ属の広葉樹及びトウヒ・ツガ等の針葉樹の枯死部分に単生から重生する。

顕微鏡的特徴

胞子：9-13×3.5-4.8 μm で長い楕円形。扁平率0.56～0.67 胞子紋は白色

担子器：長い棍棒状で30-100×5.8-8 μm 4胞子をつける。

シスチジア：みられない

試薬との呈色反応

KOH：柄のみが淡黄色

FeSO₄：ひだはサーモンピンク 柄は淡黄色

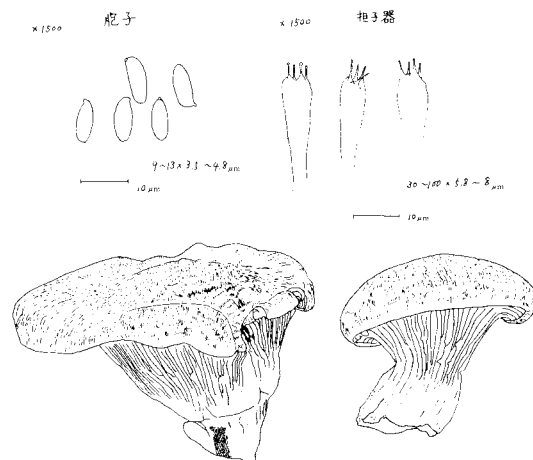


図2

(〒399-81 長野県南安曇郡郷村明盛4875)

参考文献

- 1) 滋賀大学教育学部生物研究室編：本郷次雄教授論文選集，1989.
- 2) 今関六也・本郷次雄：原色日本新菌類図鑑Ⅰ．保育社，1987.
- 3) Breitenbach, J. & F. Kränzlin: Fungi of Switzerland, vol. 3. Edition Mykologia. 1991.
- 4) Lincoff, G. H.: The Audubon Society Field Guide to North-American Mushrooms. Alfred A. Knopf Inc. 1981.
- 5) 高橋郁雄：北海道きのこ図鑑．亜璃西社，1991.
- 6) Dähncke, R. M. & S. M. Dähncke: 700 Pilze in Farbfotos. AT Verlag. 1979.

国際東洋医学会における靈芝の研究

奥沢康正

台中での靈芝展示室

第七回国際東洋医学学会が、人口80万人の台中、中医学院薬学部・医学部講内で開催された。ドイツ・韓国・台湾からの医史学宿題報告の座長と一演題をエントリーしていたため出席することとなった。パネルディスカッションを含め、漢方療法（基礎、臨床）の演題は500余，結果私は朝から3日間会場に釘づけとなった。最終日の昼食後，以前より友人副学長の吟先生から聞いていた，大学講内に新設された漢方博物館を見学した。博物館3階に靈芝のコーナーがある。ここには天然野生

靈芝，人工栽培靈芝等のカラフルな靈芝のパネル写真が展示されている。

天然野生靈芝のコーナーにはサルノコシカケからカワラタケ，その他のヒダナンタケ目の内九芎菌，猴板発等と書かれたキノコがずらりと並び，在植物分類学上屬於真菌門 (*Eumycophyta*)，担子菌綱 (*Basidiomycetes*)，多孔菌目 (*Polyporales*)，多孔菌科 (*Polyporaceae*)，芝族 (*Ganoderma*) が含まれると記載されており，靈芝 (*Ganoderma lucidum*) はわずかばかり。

人工栽培のコーナーには，同じ様な形をした光

沢のない多くの霊芝が展示されていた。パネル写真には赤芝、黒芝、白芝、紫芝、黄芝、青芝等の非常に美しい六種の霊芝が展示されていた。白芝、黄芝はそれぞれツガルサルノコシカケ、コフキサルノコシカケであった。

天然の霊芝の展示にはマゴジャクシは見られず、まして故宮博物館にあるすばらしい芸術的な霊芝とは比べ様もなく、きのこ展示としては極めて貧弱なものであった。もっとも、薬物的分類から六芝の「色」はあくまでも見た目どおりの「色」であり、菌分類学とは全く異なっていることを再確認出来た。午後より展示責任のO先生に面会を求めたが結局時間が取れず、日本から持参したおもしろい足の形をしたマゴジャクシをお土産に受付嬢に渡し展示場を後にした。その夜、台中産のお土産がどっさりホテルの部屋へ届けられているのを知ったのは夜も遅く、残念ながら今日までO先生とは連絡の取り様もなくそのままになっている。

台湾とわが国での霊芝に関連した研究

台中中国医療学院で開催された第七国際東洋医学会(1992)における霊芝の研究4題は中国医薬学院による「台湾産の霊芝の抗癌作用についての研究」「台湾高山の赤霊芝が人体生理に与える影響についての研究」および中国医薬学院生理学教室「霊芝のSuper Oxide Dismutase (SOD)についての研究」(国立台湾大学・国防医学院植物学・薬学部)「鹿茸、人參、霊芝の注射液による免疫反応による影響」(韓医科大学鍼灸学教室)であった。

それぞれの要点を述べると、第一の報告は「台湾産霊芝の3種のお湯の抽出液(GLDE, GALD, GCDE)を初期癌、末期癌のマウスに経口投与した結果、初期癌にはGALDが末期癌にはGCDEが最良」であった。

第二の報告は「台湾高山の赤霊芝の水の抽出液を人間に投与した場合は、急性毒性の試験、健康人の心拍数、呼吸数、心電図への影響について検討した結果、人間の血圧に良好な降圧効果を認め心拍数を著しく減少させた」であった。

第三の報告は「霊芝の成長期を5段階に分け、それぞれの霊芝のSODを電気泳動法で分析した結果、異なる成長段階の霊芝はすべてSODの同功酸素に抑制作用を認めた」ことであった。

第四の報告は「マウスに霊芝の水あるいはアルコールの抽出液を注射し、腫瘍免疫学の観点から

脾臓のKNCAを測定した結果、有意差を認めた」であった。

以上の4題中前3題が中国語、最後の演題は韓国語で発表され、それぞれ英語に訳され聞くことになった。スライドはいずれも手書きが多くやや読み取りにくい所もあったが、成長段階での3種の霊芝(これもやはり赤芝、青芝、黒芝に区別した万年茸)の電顕・写真は非常に鮮明であった。

台湾での霊芝ブームは思ったより根強く非常にアカデミックな要素を取り入れ、現代医学を駆使して発表している現状を見た。そこでわが国における霊芝に関する学術研究を振り返り今日の研究の最先端を見てみたい。

日本では古来より万病に用いられてきた生薬ではあるが自生しているものが少なく、入手が困難なことから、珍重され「仙薬」と呼ばれていたが1946年人工栽培が成功するに従い薬理作用、成分等の学術的研究が盛んに行われ出した。

薬理作用として血圧降下作用①、高脂血症改善作用②、血小板凝集抑制作用③、抗トロンビン作用④、ヒスタミン遊離抑制作用⑤、抗アレルギー作用⑥、抗腫瘍活性作用⑦、その他中枢神経抑制作用、気管平滑筋の痙攣解除作用、肝臓保護作用等が報告され、これらの成分のうち1982年、ganoderic acid A及びBの構造式が久保田等により決定され、特に1984年よりテルペノイドと多糖類の研究が多く行なわれ、それぞれの単離品の薬効が報告されている。

しかし報告例のほとんどが動物実験段階であり学術的臨床研究例は極めて少なかった。1988年頃より1990年にかけて富山医科薬科大学・和漢薬研究所・病態生化学部門より「霊芝成分によるNK細胞活性増加機構の薬理遺伝学的解除⑥」、1990年「霊芝成分の免疫機能調整作用に及ぼす影響について⑦」「コレステロール負荷後の動脈硬化性病変に対する霊芝の効果⑧」いずれも1990年のマウス実験より1992年「進行肺癌化学療法付帯例に対する非治癒切除および和漢薬(*Ganoderma lucidum*)併用の効果について⑨」と題し富山医科薬科大学外科教室付属病院救急部が肺癌非治癒切除例6例に霊芝熱水抽出エキス750mgの連日経口投与(株式会社ペンソニック製)を行い、6ヶ月以上の経過例ではいずれも増悪傾向なく、長期の延命症例を得たと報告されている。

今日のわが国の多くの健康読本の中には霊芝液

(発酵液), 靈芝チンキ (20%濃度, 生薬の6gに相当), 靈芝錠 (一錠は生薬の0.5gに相当), 靈芝注射液 (1 CC中に成薬0.5g~1g), 靈芝シロップ等が販売され, 臨床応用には何と慢性気管支炎, 気管支喘息, 白血球減少症, 冠状動脈硬化性心疾患, 不整脈, 肺癌抑制, 急性ウイルス性肝炎, 重症筋無力症胃潰瘍, 消化不良等の慢性胃腸疾患, 腎炎, 各種のきのこ中毒を初めとして硅肺, 糖尿病, 甲状腺機能亢進症, アレルギー性鼻炎, リウマチ性肉節炎, リウマチ性心臓病にも試用され効果を認めた等の発表があり, 万病に効く錯覚におちいる。

しかし, いずれにしても今後の臨床実験データの積み重ねと, 基礎実験により確立して行かなければならない問題であり, 臨床の唯一例に著効した等との報告による安易な薬効を発表するこ

とだけは出来るだけ慎むべきと思う。

(〒621 京都市西京区桂千代原口72-13)

参 考 文 献

- 1) 有池 滋他: 靈芝の研究—マンネンタケ熱水抽出エキスの血圧効果作用—基礎と臨床 13. 175-180. 1987.
- 2) 久保道德他: 靈芝の研究—マンネンタケ熱水抽出エキスの実験的高脂血症に対する作用—基礎と臨床 14. 2455-2460. 1980.
- 3) 久保道德他: 靈芝の研究—播種性血管内凝固に対する作用—薬学雑誌 108. 871-877. 1983.
- 4) 野上真理他: 靈芝の研究—抗アレルギー作用について—薬学雑誌 106. 600-604. 1986.
- 5) 水野卓也: 靈芝の水溶性多類の企画. 化学修飾. 抗腫瘍活性について. 日本農芸科学学会誌 59. 1142-1151. 1984.
- 6) 西本 隆他: 和漢医薬学会誌 7. 300-301. 1990.
- 7) 坪倉道明他: 和漢医薬学会誌 5. 522-523. 1988.
- 8) 杉山茂樹他: 富山医薬大医誌 5. 11-13. 1922.

原色台湾薬用植物図鑑より きのこさがし覚書

No.	台湾名	台湾での発音	和 名	学 名	台 湾 での 別 名
1	木 耳	Mu-erh	キ ク ラ ケ	<i>Auricularia auriculajudae</i>	味, 樹鵝, 木哩, 木菜, 木蛾, 雲耳
2	白 木 耳	Pai-mu-erh	シロキクラケ	<i>Tremella fuciformis</i>	銀耳, 白耳子
3	香 蕈	Hsiang-chün	シイタケ	<i>Lentinus edodes</i>	香菇, 香蕈, 香信
4	鵝 寶	Chi-tsiung	和 名 な い	<i>Collybia albuminosa</i>	鵝寶, 鵝寶蕈, 鵝菌, 鵝環, 鵝環菜, 鵝肉菇, 鵝肉絲菇, 鵝菌, 鵝脚蕈, 鵝把菇, 三環菌
5	紫 芝	Tzu-chih	マンネンタケ	<i>Ganoderma japonicum</i>	木芝, 三秀, 肉芝, 靈芝草
6	赤 芝	Chih-chih	マンネンタケ	<i>Ganoderma lucidum</i>	丹芝, 三秀, 肉芝, 靈芝, 靈芝草, 萬年茸
7	雲 芝	Yün-chih	カラシタケ	<i>Coriolus versicolor</i>	皺蓋假芝, 假芝, 相思烏芝
8	皺蓋烏芝	Chou-kai-wu-chih	ウチワタケ	<i>Amauroderma rude</i>	雲耳, 雜色木芝
9	苦白蹄菇	Kü-pai-ti-ku	ホヅリコ	<i>Fomitopsis officinalis</i>	苦白蹄, 藥用層孔菌, 阿里紅, 針葉松茸
10	白蹄菇	Pai-ti-ku	ツガルセルノコカケ	<i>Fomitopsis pinicola</i>	猴椅, 猴腰掛, 猴板兒, 大毒芝, 千年靈芝, 托架菌
11	樹 舌	Shu-she	コノシタケ	<i>Ganoderma applanatum</i>	不蓋靈芝, 扁芝, 扁盤, 白木靈芝, 白斑腐菌, 赤色老母菌, 皇角菌
12	薄蓋靈芝	Po-kai lin-chih	ハクマンシタケ	<i>Ganoderma capense</i>	薄蓋環芝, 薄環芝
13	毛蜂窩菌	Mao-feng-wo-chün	ホウロクダケ シウホウロクダケ?	<i>Davallia dickinsii</i> か? <i>Hexagona aptera</i>	龍眼蜂窩菇, 龍眼梳 (シウホウロクダケは台湾薬用植物図鑑に記載. 和名ではない. おそらく中国語の読みであろう. 筆者はホウロクダケと考える.)
14	樟 摺 孔 菌	Hua-che-kung-chün	カイカラダケ	<i>Lenzites betulina</i>	菌菇, 樟草草菌, 柑橋白菇, 貝茸
15	光亮團扇芝	Kuan-liang-tuanshan-chih	ツヤウチワタケ	<i>Microporus affinis</i>	光亮團扇菇
16	針 層 孔 菌	Chen-tseng-kung-chün	キノノダケ	<i>Phellinus igniarius</i>	桑黄, 桑臣, 桑耳, 胡孫眼, 桑黄菇, 桑仔菇
17	黄 多 孔 菌	Huang-to-kung-chün	キノングロダケ	<i>Polyporellus elegans</i>	雞蕈, 蕨菇
18	朱 紅 栓 菌	Chu-hung-shuan-chün	シノダケ	<i>Trametes cinnabarina</i>	紅栓菌, 朱砂菌, 膠脂栓菌, 緋紅栓菌
19	有 柄 馬 勃	Yu-pingmapo	キノノチャブクロ	<i>Lycoperdon gemmatum</i>	埃塵, 網紋馬勃, 網紋灰包
20	乳 突 地 星 菌	Ju-tü-ti-hsin-chün	ゴリンキョウチガキ	<i>Geastrum triplex</i>	左尖頂地星, 地星, 土星菌

セミタケのホストは？

シロマキセミタケ (仮称) の採集報告

杉山 信夫

セミタケ (*Cordyceps soborifera* (Hill.) Berk et Broome) はわが国では栃木県以南の各地に広く分布している。時として1カ所で大発生するなど、冬虫夏草菌としては比較的多産する普通種とみられている。特筆すべきことは、寄主であるセミ幼虫が国内ではニイニゼミ (*Platypleura kaempferi*) に限られる。と信じられている点にある。多くの図鑑にもニイニゼミをホスト。もしくはニイニゼミ生息地にのみ発生すると記載されている。

筆者は1988年7月19日、京都府宇治市においてアブラゼミ (*Graptopsaltra nigrofuscata*) をホストとする *C. soborifera* と思われる1個体を採集した。以後1993年まで40数個体を採集しているので概略を紹介したい。

子座は柄を持ち地中にあるアブラゼミ幼虫頭部より1本、稀に2~4本生じ、こん棒形肉質、高さ5~7(10)cm、未成熟では淡褐色、成熟にともない子座表面は茶褐色となる。ペリテシアは埋生形で先端部がわずかに突出する。

C. soborifera に見られる基部のコブ状突起はないか、ほとんど目立たない。ホストは例外なく白色菌糸に完全に包まれ、種の同定には菌糸膜の切開が必要である。(写真参照)

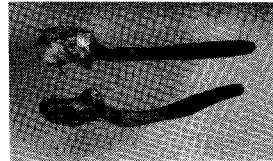
発生地はソメイヨシノ、カエデ、イロハモミジ、

クロガネモチ、アラカン等の混植地。発生個所での土壌 pH は (6.2) 6.5~6.7であった。

同採集種は大形であること、ホストがアブラゼミであること、ホスト全体が白色菌糸に完全に包まれていることの点を除けば、外見は *C. soborifera* に酷似する。子のう、子のう胞子等も既知のセミタケと区分する明確な特徴、相違点は認められない。また、同所でニイニゼミをホストするセミタケ *C. soborifera* も少数ながら混在して発生する。

この標本の検討を願っている吉見昭一氏は、これにシロマキセミタケの和名を提案された。本種の特徴である虫体が白色菌糸に包まれている状態を顕す適名であると考えている。

ここでは採集報告をするにとどめた。会員諸兄の各地での調査を望みたいとの予告的稿であり、今後さらに多数の標本を検討の上、あらためて報告するつもりである。



(京都市伏見区向島藤ノ木町72-9-1-1020)

1993年度 活動の記録 (上半期)

第304回例会 檀原神宮菌類観察・採集会

日時：1993年7月11日(日)曇り後晴れ

67名参加

場所：檀原市檀原神宮境内(シイ・カシ林)

今年、初めての採集会とあって、待ちに待っていた67名の参加でにぎやかであった。今年是比较的雨が多く、121種とたくさんのきのこが採集された。採集品のなかでは、初めて採れたオニフスベに注目が集まった。

一方、昨年沢山採集されたセミタケは少なかった。採集会の直前に長雨が続き、新鮮な個体が少なかったのが残念であった。(荒井 滋)

採集品リスト

- | | |
|------------------------------------|----------|
| 1 <i>Pleurotus pulmonarius</i> | ウスヒラタケ |
| 2 <i>Schizophyllum commune</i> | スエヒロタケ |
| 3 <i>Lentinellus ursinus</i> | イタチナミハタケ |
| 4 <i>Hygrocybe</i> sp. | アカヤマタケ属 |
| 5 <i>Asterophora lycoperdoides</i> | ヤグラタケ |

6	<i>Laccaria amethystea</i>	ウラムラサキ	62	<i>Russula pectinatoides</i>	クシノハタケモドキ
7	<i>Laccaria vinaceoavellanea</i>	カレバキツネタケ	63	<i>Russula sororia</i>	キチャハツ
8	<i>Laccaria ohiensis</i>	キツネタケモドキ?	64	<i>Russula cyanoxantha</i>	カワリハツ
9	<i>Lepista sordida</i>	コムラサキシメジ	65	<i>Russula vesca</i>	チギレハツタケ
10	<i>Collybia butyracea</i>	エセオリミキ	66	<i>Russula mariae</i>	ニオイコベニタケ
11	<i>Collybia</i> sp.	モリノカレバタケ属	67	<i>Russula amoena</i>	ムラサキカスリタケ
12	<i>Oudemansiella pudens</i>	ビロードツエタケ	68	<i>Russula virescens</i>	アイタケ
13	<i>Marasmius pulcherripes</i>	ハナオチバタケ	69	<i>Russula castanopsidis</i>	カレバハツ
14	<i>Marasmius maximus</i>	オオホウライタケ	70	<i>Russula fragilis</i>	コベニタケ
15	<i>Marasmius</i> sp.	オオホウライタケ近縁種	71	<i>Russula emetica</i>	ドクベニタケ
16	<i>Marasmius</i> sp.	ホウライタケ属	72	<i>Russula</i> sp.	ベニタケ属
17	<i>Mycena pura</i>	サクラタケ	73	<i>Lactarius gerardii</i>	クロチヂダマン
18	<i>Hydrophus floccipes</i>	ニセアジナガタケ	74	<i>Lactarius subplinthogalus</i>	ヒロハウスズミチチタケ
19	<i>Xeromphalina campanella</i>	ヒメカバイロタケ	75	<i>Lactarius gracilis</i>	アンボソチチタケ
20	<i>Cyptotrama asprata</i>	ダイダイガサ	76	<i>Lactarius subzonarius</i>	ニオイワチチタケ
21	<i>Amanita farinosa</i>	ヒメコナカブリツルタケ	77	<i>Lactarius quietus</i>	チョウジチチタケ
22	<i>Amanita pantherina</i>	テングタケ	78	<i>Lactarius akahatsu</i>	アカハツ
23	<i>Amanita ceciliae</i>	テングツルタケ	79	<i>Lactarius</i> sp.	チチタケ属
24	<i>Amanita vaginata</i> var. <i>fulva</i>	カバイロツルタケ	80	<i>Cantharellus cibarius</i>	アンズタケ
25	<i>Amanita longistriata</i>	タマゴテングタケモドキ	81	<i>Cantharellus</i> sp.	アンズタケ属
26	<i>Amanita fuliginosa</i>	クロタマゴテングタケ	82	<i>Clavaria vermicularis</i>	シロソウメンタケ
27	<i>Amanita spissacea</i>	ヘビキノコモドキ	83	<i>Ramariopsis</i> sp.	ヒメホウキタケ属
28	<i>Amanita</i> sp.	キリントケ近縁種	84	<i>Clavulina cristata</i>	カレエダタケ
29	<i>Volvariella subtaylori</i>	コフクロタケ	85	<i>Clavulina</i> sp.	カレエダタケ属
30	<i>Macrolepiota</i> sp.	カラカサタケ属	86	<i>Polyporus tuberaster</i>	タマチョレイタケ
31	<i>Leucocoprinus otsuensis</i>	ミノヒガサタケ	87	<i>Polyporus squamosus</i>	アミヒラタケ
32	<i>Agaricus abruptibulbus</i>	ウスキモリノカサ	88	<i>Polyporus arcularius</i>	アミスギタケ
33	<i>Agaricus</i> sp.	ハラタケ属	89	<i>Polyporus badius</i>	アシグロタケ
34	<i>Lepiota</i> sp.	キツネノカラカサタケ属	90	<i>Microporus vernicipes</i>	ツヤウチワタケ
35	<i>Coprinus micaceus</i>	キララタケ	91	<i>Ganoderma lucidum</i>	マンネンタケ
36	<i>Coprinus rhizophorus</i>	ホソネヒトヨタケ	92	<i>Onnia vallata</i>	アズマタケ
37	<i>Psathyrella candolliana</i>	イタチタケ	93	<i>Astraeus hygrometricus</i>	ツチグリ
38	<i>Psathyrella</i> sp.	ナヨタケ属	94	<i>Scleroderma areolatum</i>	ヒメカタショウロ
39	<i>Agrocybe cylindracea</i>	ヤナギマツタケ	95	<i>Scleroderma</i> sp.	ニセショウロ属
40	<i>Naematoloma fasciculare</i>	ニガクリタケ	96	<i>Crucibulum leave</i>	ツネノチャダイゴケ
41	<i>Inocybe lutea</i>	キイロアセタケ	97	<i>Gastrum</i> sp.	ヒメツチグリ属
42	<i>Rhodophyllus</i> sp.	イッポンシメジ属	98	<i>Lanopila nipponica</i>	オニフスベ
43	<i>Strobilomyces confusus</i>	オニイグチモドキ	99	<i>Calvatia craniiformis</i>	ノウタケ
44	<i>Suillus granulatus</i>	チチアワタケ	100	<i>Calvatia boninensis</i>	オオノウタケ
45	<i>Phylloporus bellus</i>	キヒダタケ	101	<i>Lycoperdon</i> sp.	ホコリタケ属
46	<i>Xerocomus subtomentosus</i>	アワタケ	102	<i>Pseudocolus schellenbergiae</i>	サンコタケ
47	<i>Xerocomus nigromaculatus</i>	クロアザアワタケ	103	<i>Phallus rugulosus</i>	キツネノタイマツ
48	<i>Xerocomus</i> sp.	アワタケ属	104	<i>Tremella fuciformis</i>	シロキクラゲ
49	<i>Boletus reticulatus</i>	ヤマドリタケモドキ	105	<i>Tremella foliacea</i>	ハナビラニカワタケ
50	<i>Boletus violaceofuscus</i>	ムラサキヤマドリタケ	106	<i>Guepinia spathularia</i>	ツノマタタケ
51	<i>Boletus speciosus</i>	アカジコウ	107	<i>Bulgaria inquinans</i>	ゴムタケ
52	<i>Boletus fraternus</i>	コウジタケ	108	<i>Helvella elastica</i>	アシボソノボリリュウタケ
53	<i>Boletus pulverulentus</i>	イロガワリ	109	<i>Helvella crispa</i>	ノボリリュウタケ
54	<i>Tylopilus vinosobrunneus</i>	ブドウニガイグチ	110	<i>Helvella ephippioides</i>	ナガエノケノボリリュウタケ
55	<i>Tylopilus</i> sp.	ニガイグチ属	111	<i>Humaria hemisphaerica</i>	シロスズメノワン
56	<i>Russula japonica</i>	シロハツモドキ	112	<i>Cordyceps sobolifera</i>	セミタケ
57	<i>Russula densifolia</i>	クロハツモドキ	113	<i>Tilachliidiopsis nigra</i>	オサムシタケ
58	<i>Russula compacta</i>	アカカバイロタケ	114	<i>Otidea onotica</i>	ウスベニミミタケ属
59	<i>Russula foetens</i>	クサハツ	115	<i>Tuber magnatum</i>	シロセイヨウショウロ
60	<i>Russula</i> sp.	クサハツ近縁種	116	<i>Trichoglossum</i> sp.	テングノメンガイ属
61	<i>Russula laurocerasi</i>	クサハツモドキ			

- 117 *Cordycops oxycephala* トガリスズメバチタケ
 118 *Xylaria perlsicaria* フウノミタケ
 119 *Xylaria* sp. クロサイワイタケ属
 120 *Isaria atypicola* クモタケ
 121 *Hypomyces* sp. タケリタケ

- 28 *Paxillus atrotomentosus* ニワタケ
 29 *Paxillus atrotomentosus* var. *bambusinus* ヤブニワタケ
 30 *Austroboletus subvirens* オオヤシャイグチ
 31 *Boletellus emodensis* キクバナイグチ
 32 *Phylloporus bellus* var. *cyanescens* イロガワリキヒダタケ

第305回例会 宇治・興聖寺菌類観察・採集会

日 時：1993年7月25日（日）

51名参加

場 所：宇治市興聖寺境内

台風の影響で豪雨の予報が出されていたが、少し風は強いもののすっかり天気が回復し、初夏の陽ざしの中で観察・採集会を行なえた。ひととき緑の濃くなった琴坂を登って集合地点に着く。興聖寺裏山の大吉山・朝日山は落ちついた社寺林で、麓はシイ林が発達し、尾根にかけてはコナラやアカマツが混じっている。

ユニークな形のカブラマツタケなど採集品も多く、楽しい採集会だった。（橋屋 誠）

採集品リスト

- 1 *Pleurotus salmoneostramineus* トキイロヒラタケ
 2 *Lentinus lepideus* マツオウジ
 3 *Laccaria vinaceoavellanea* カレバキツネタケ
 4 *Armillariella tabescens* ナラタケモドキ
 5 *Callistosporium luteoolivaceum* ヒメキシメジ
 6 *Amanita pseudogemmata* イボコガネテングタケ
 7 *Amanita sychnopyraxis* f. *subannulata* テングタケダマシ
 8 *Amanita vaginata* var. *fulva* カバイロツルタケ
 9 *Amanita pseudoporphyria* コテングタケモドキ
 10 *Amanita citrina* var. *grisea* クロコタマゴテングタケ
 11 *Amanita volvata* フクロツルタケ
 12 *Amanita spissacea* ヘビキノコモドキ
 13 *Oudemansiella pudens* ビロードツエタケ
 14 *Amanita virgineoides* シロオニタケ
 15 *Amanita* sp. ドクツルタケ近縁種
 16 *Amanita* sp. テングタケ属
 17 *Leucoagaricus rubrotinctus* アカキツネガサ
 18 *Lepiota pseudogranulosa* コナカラカサタケモドキ
 19 *Squamanita umbonata* カブラマツタケ
 20 *Psathyrella* sp. ナヨタケ属
 21 *Inocybe lutea* キイロアセタケ
 22 *Cortinarius anomalus* マルミノフウセンタケ
 23 *Cortinarius salor* ムラサキアブラシメジモドキ
 24 *Cortinarius* sp. フウセンタケ属
 25 *Crepidotus mollis* チャヒラタケ
 26 *Rhodophyllus murrarii* キイボガサタケ
 27 *Rhodophyllus cyanoniger* コンイロイッポンシメジ
 28 *Paxillus atrotomentosus* ニワタケ
 29 *Paxillus atrotomentosus* var. *bambusinus* ヤブニワタケ
 30 *Austroboletus subvirens* オオヤシャイグチ
 31 *Boletellus emodensis* キクバナイグチ
 32 *Phylloporus bellus* var. *cyanescens* イロガワリキヒダタケ
 33 *Xerocomus chrysenteron* キッコウアワタケ
 34 *Xerocomus nigromaculatus* クロアザアワタケ
 35 *Aureoboletus thibetanus* スメリコウジタケ
 36 *Boletus ornatipes* キアミアシイグチ
 37 *Boletus sinapicolor* f. *japonicus* ヨゴレキアミアシイグチ
 38 *Boletus fraternus* コウジタケ
 39 *Boletus pseudocalopus* ニセアシベニイグチ
 40 *Boletus laetissimus* ダイダイイグチ
 41 *Tylopilus fumosipes* アイゾメクロイグチ
 42 *Tylopilus neofelleus* ニガイグチモドキ
 43 *Tylopilus ballouii* キニガイグチ
 44 *Tylopilus valens* ホオベニシロアシイグチ
 45 *Tylopilus rugulosoreticulatus* コニガイグチ
 46 *Russula japonica* シロハツモドキ
 47 *Russula nigricans* クロハツ
 48 *Russula densifolia* クロハツモドキ
 49 *Russula rubescens* イロガワリベニタケ
 50 *Russula senis* オキナクサハツ
 51 *Russula cyanoxantha* カワリハツ
 52 *Russula vesca* チギレハツタケ
 53 *Russula virescens* アイタケ
 54 *Russula viridirubrolimbata* フタイロベニタケ
 55 *Russula alboareolata* ヒビワレシロハツ
 56 *Russula castanopsidis* カレバハツ
 57 *Russula lilacea* ウスムラサキハツ
 58 *Russula rosacea* ヤブレベニタケ
 59 *Russula kansaiensis* ヒナベニタケ
 60 *Russula* sp. ベニタケ属 クロハツ近縁種
 61 *Lactarius piperatus* ツチカブリ
 62 *Lactarius volemus* チチタケ
 63 *Lactarius corrugis* チリメンチチタケ
 64 *Lactarius gerardii* クロチチダマシ
 65 *Lactarius gracilis* アンボソチチタケ
 66 *Lactarius quietus* チョウジチチタケ
 67 *Lactarius uedae* シロヒメチチタケ
 68 *Lactarius* sp. モチゲチチタケ
 69 *Clavulinopsis miyabeana* ベニナギナタタケ
 70 *Clavulina cristata* カレエダタケ
 71 *Clavulina cinerea* ハイイロカレエダタケ
 72 *Clavulina* sp. カレエダタケの仲間
 73 *Sparassis crispa* ハナビラタケ
 74 *Microporus flabelliformis* ウチワタケ
 75 *Cryptoporus volvatus* ヒトクチタケ
 76 *Coltricia cinnamomea* ニッケイタケ
 77 *Lenzites betulina* カイガラタケ
 78 *Trichaptum abietinum* シハイタケ
 79 *Ganoderma neo-japonicum* マゴジャクシ
 80 *Elfvigia applanata* コフキササルノコシカケ
 81 *Onnia vallata* アズマタケ

- | | | | |
|--|------------|---|-----------|
| 82 <i>Pseudocolus schellenbergiae</i> | サンコタケ | 32 <i>Amanita porphyria</i> | コテングタケ |
| 83 <i>Jansia borneensis</i> | コイスノエフデ | 33 <i>Amanita citrina</i> var. <i>citrina</i> | コタマゴテングタケ |
| 84 <i>Auricularia auricula</i> | キクラゲ | 34 <i>Amanita volvata</i> | フクロツルタケ |
| 85 <i>Helvella macropus</i> var. <i>macropus</i> | ナガエノチャワンタケ | 35 <i>Amanita flavipes</i> | コガネテングタケ |
| 86 <i>Cordyceps</i> sp. | シロマキセミタケ | 36 <i>Amanita rubescens</i> | ガンタケ |
| 87 <i>Xylaria carpophila</i> | ホソツクシタケ | 37 <i>Amanita spissacea</i> | ヘビキノコモドキ |
| 88 <i>Isaria atypicola</i> | クモタケ | 38 <i>Amanita</i> sp. | テングタケ属 |

第306回例会 乗鞍高原菌類観察・採集会

日時：1993年8月21日(土)～24日(火)

79名参加

場所：長野県南安曇郡安曇村乗鞍高原（主にオオシラビソ林・カンバ林）

昨年より時期を遅らせて実施した結果、天候にも恵まれ、昨年より種数・個体数ともに多かった。ツガ林のマツタケの大きさには度肝を抜かれた。また、ドクヤマドリやオオウスムラサキフウセンタケなど関西では珍しいきのこも多数見られた。（佐々木久雄）

採集品リスト

- | | | | |
|---|---------------|---|----------------|
| 1 <i>Pleurotus ostreatus</i> | ヒラタケ | 50 <i>Cortinarius traganus</i> | オオウスムラサキフウセンタケ |
| 2 <i>Hygrophorus camarophyllus</i> | ヤギタケ | 51 <i>Cortinarius trivialis</i> | マムシフウセンタケ（仮称） |
| 3 <i>Hygrophorus poecharum</i> | アケボノサクラシメジ近縁種 | 52 <i>Cortinarius pholideus</i> | ササクレフウセンタケ |
| 4 <i>Hygrocybe olivaceoviridis</i> | トガリワカクサタケ | 53 <i>Cortinarius anomalus</i> | マルミノフウセンタケ |
| 5 <i>Hygrocybe</i> sp. | アカヤマタケ属 | 54 <i>Cortinarius azureus</i> | ハイムラサキフウセンタケ |
| 6 <i>Lyophyllum connatum</i> | オシロイシメジ | 55 <i>Cortinarius bolaris</i> | アカツブフウセンタケ |
| 7 <i>Lyophyllum semitale</i> | スミゾメシメジ | 56 <i>Cortinarius salor</i> | ムラサキアブラシメジモドキ |
| 8 <i>Laccaria amethystea</i> | ウラムラサキ | 57 <i>Cortinarius violaceus</i> | ムラサキフウセンタケ |
| 9 <i>Laccaria bicolor</i> | オオキツネタケ | 58 <i>Cortinarius rubicundulus</i> | イロガワリフウセンタケ |
| 10 <i>Laccaria laccata</i> | キツネタケ | 59 <i>Cortinarius subalboviolaceus</i> | ウスムラサキフウセンタケ |
| 11 <i>Lepista</i> sp. | ムラサキシメジ属 | 60 <i>Cortinarius obtusus</i> | サザナミニセフウセンタケ |
| 12 <i>Tricholoma saponaceum</i> | ミネシメジ | 61 <i>Cortinarius armillatus</i> | ツバフウセンタケ |
| 13 <i>Tricholoma virgatum</i> | ネズミシメジ | 62 <i>Cortinarius</i> sp. | フウセンタケ属 |
| 14 <i>Tricholoma matsutake</i> | マツタケ | 63 <i>Dermocybe cinnamomea</i> | ササタケ |
| 15 <i>Tricholoma psammopus</i> | カラマツシメジ | 64 <i>Dermocybe semisanguinea</i> | アカヒダササタケ |
| 16 <i>Collybia maculata</i> | アカアザタケ | 65 <i>Dermocybe phoenicea</i> | アカササタケ |
| 17 <i>Collybia acerata</i> | カブベニチャ | 66 <i>Dermocybe sanguinea</i> | アカタケ |
| 18 <i>Collybia peronata</i> | ワサビカレバタケ | 67 <i>Gymnopilus spectabilis</i> | オオワライタケ |
| 19 <i>Collybia cookei</i> | タマツキカレバタケ | 68 <i>Phaeocollybia</i> sp. | カワムラジンガサタケ属 |
| 20 <i>Oudemansiella platyphylla</i> | ヒロヒダタケ | 69 <i>Rhodophyllum rhodopolius</i> | クサウラベニタケ |
| 21 <i>Mycena pura</i> | サクラタケ | 70 <i>Rhodophyllum murrarii</i> | キイボガサタケ |
| 22 <i>Amanita farinosa</i> | ヒメコナカブリツルタケ | 71 <i>Rhodophyllum murrarii</i> f. <i>albus</i> | シロイボガサタケ |
| 23 <i>Amanita muscaria</i> | ベニテングタケ | 72 <i>Rhodophyllum crassipes</i> | ウラベニホテイシメジ |
| 24 <i>Amanita rubrovolvata</i> | ヒメベニテングタケ | 73 <i>Paxillus involutus</i> | ヒダハタケ |
| 25 <i>Amanita pantherina</i> | テングタケ | 74 <i>Chroogomphus tomentosus</i> | フサクギタケ |
| 26 <i>Amanita vaginata</i> var. <i>vaginata</i> | ツルタケ | 75 <i>Gyroporus castaneus</i> | クリイロイグチ |
| 27 <i>Amanita vaginata</i> var. <i>punctata</i> | オオツルタケ | 76 <i>Boletinus cavipes</i> | アミハナイグチ |
| 28 <i>Amanita vaginata</i> var. <i>fulva</i> | カバイロツルタケ | 77 <i>Suillus pictus</i> | ベニハナイグチ |
| 29 <i>Amanita hemibapha</i> subsp. <i>hemibapha</i> | タマゴタケ | 78 <i>Suillus placidus</i> | ゴヨウイグチ |
| 30 <i>Amanita virosa</i> | ドクツルタケ | 79 <i>Suillus grevillei</i> | ハナイグチ |
| 31 <i>Amanita fuliginosa</i> | クロタマゴテングタケ | | |

80	<i>Suillus tomentosus</i>	ワタゲスメリイグチ	133	<i>Clavulina ornatipes</i>	ケアシホウキタケ
81	<i>Xerocomus chrysenteron</i>	キッコウアワタケ	134	<i>Ramaria flava</i>	キホウキタケ
82	<i>Chalciporus piperatus</i>	コショウイグチ	135	<i>Ramaria rubella</i>	和名なし
83	<i>Pulveroboletus ravenelii</i>	キイロイグチ	136	<i>Ramaria</i> sp.	ホウキタケ属
84	<i>Boletus reticulatus</i>	ヤマドリタケモドキ	137	<i>Gomphus floccosus</i>	ウスタケ
85	<i>Boletus sensibilis</i>	ミヤマイロガワリ	138	<i>Xylobolus spectabilis</i>	モミジウロコタケ
86	<i>Boletus</i> sp.	ドクヤマドリ	139	<i>Hydnum repandum</i>	カノシタ
87	<i>Boletus violaceofuscus</i>	ムラサキヤマドリタケ	140	<i>Hydnum repandum</i> var. <i>album</i>	シロカノシタ
88	<i>Boletus calopus</i>	アシベニイグチ	141	<i>Thelephora</i> sp.	イボタケ属
89	<i>Boletus aereus</i>	ススケヤマドリタケ	142	<i>Hydnellum conrescens</i>	チャハリタケ
90	<i>Boletus appendiculatus</i>	ミヤマアミアシイグチ	143	<i>Hydnellum caeruleum</i>	ニオイハリタケ
91	<i>Boletus odatensis</i>	オオダイアシベニイグチ	144	<i>Hydnellum suaveolens</i>	ニオイハリタケモドキ
92	<i>Boletus speciosus</i>	アカジコウ	145	<i>Hydnellum ferugineum</i>	オオサビハリタケ
93	<i>Boletus pulverulentus</i>	イロガワリ	146	<i>Phellodon graveolens</i>	クサハリタケ
94	<i>Boletus subvelutipes</i>	アメリカウラベニイロガワリ	147	<i>Phellodon niger</i>	クロハリタケ
95	<i>Tylopilus chromapes</i>	アケボノアワタケ	148	<i>Sarcodon scabrosus</i>	ケロウジ
96	<i>Tylopilus eximius</i>	ウラグロニガイグチ	149	<i>Sarcodon matioflavus</i>	和名なし
97	<i>Tylopilus nigerrimus</i>	モエギアミアシイグチ	150	<i>Boletopsis leucomelas</i>	クロカワ
98	<i>Tylopilus vinosobrunneus</i>	ブドウニガイグチ	151	<i>Piptoporus betulinus</i>	カンバタケ
99	<i>Tylopilus neofelleus</i>	ニガイグチモドキ	152	<i>Polyporellus picipes</i>	アシグロタケ
100	<i>Leccinum extremorientale</i>	アカヤマドリ	153	<i>Phaeolus schweinitzii</i>	カイメンタケ
101	<i>Leccinum versipelle</i>	キンチャヤマイグチ	154	<i>Phellinus tuberculatus</i>	サクラサルノコシカケ
102	<i>Leccinum scabrum</i>	ヤマイグチ	155	<i>Coltricia cinnamomea</i>	ニッケイタケ
103	<i>Russula nigricans</i>	クロハツ	156	<i>Favolus alveolaris</i>	ハチノスタケ
104	<i>Russula ochroleuca</i>	ヤマブキハツ	157	<i>Trichaptum fuscoviolaceum</i>	ウスバシハイタケ
105	<i>Russula xerampelina</i>	ニオイベニハツ	158	<i>Heterobasidion insularis</i>	レンガタケ
106	<i>Russula densifolia</i>	クロハツモドキ	159	<i>Laetiporus sulphureus</i>	マスタケ
107	<i>Russula eburneoareolata</i>	ツギハギハツ	160	<i>Fomitopsis pinicola</i>	ツガサルノコシカケ
108	<i>Russula foetens</i>	クサハツ	161	<i>Bondarzewia montana</i>	ミヤマトンビマイタケ
109	<i>Russula laurocerasi</i>	クサハツモドキ	162	<i>Onnia scaura</i>	サジタケ
110	<i>Russula metachroa</i>	イロガワリシロハツ	163	<i>Fuscoportia obliqua</i>	カバノアナタケ
111	<i>Russula aeruginea</i>	クサイロハツ	164	<i>Nidula niveo-tomentosa</i>	コチャダイゴケ
112	<i>Russula betularum</i>	カンバベニタケ	165	<i>Phallus impudicus</i>	スッポンタケ
113	<i>Russula cyanoxantha</i>	カワリハツ	166	<i>Pseudohydnum gelatinosum</i>	ニカワハリタケ
114	<i>Russula flavida</i>	ウコンハツ	167	<i>Calocera viscosa</i>	ニカワホウキタケ
115	<i>Russula lilacea</i>	ウスムラサキハツ	168	<i>Cudonia</i> sp.	ホテイタケ属
116	<i>Russula emetica</i>	ドクベニタケ	169	<i>Spathularia flavida</i>	ヘラタケ
117	<i>Russula neoemetica</i>	ドクベニダマシ	170	<i>Leotia lubrica</i> f. <i>lubrica</i>	ズキンタケ
118	<i>Lactarius piperatus</i>	ツチカブリ	171	<i>Bisporella citrina</i>	ビョウタケ
119	<i>Lactarius vellereus</i>	ケシロハツ	172	<i>Helvella macropus</i> var. <i>macropus</i>	ナガエノチャワソウタケ
120	<i>Lactarius volemus</i>	チチタケ	173	<i>Cordyceps militaris</i>	サナギタケ
121	<i>Lactarius gerardii</i>	クロチチダマシ	174	<i>Cordyceps capitata</i>	タンポタケ
122	<i>Lactarius glaucescens</i>	アオゾメツチカブリ	175	<i>Cordyceps ophioglossoides</i>	ハナヤスリタケ
123	<i>Lactarius helvus</i>	アカチチモドキ	176	<i>Cordyceps sobolifera</i>	セミタケ
124	<i>Lactarius lignyotus</i>	クロチチタケ	177	<i>Hypomyces</i> sp.	タケリタケ
125	<i>Lactarius hysginus</i>	スメリアカチチタケ			
126	<i>Lactarius torminosus</i>	カラハツタケ			
127	<i>Lactarius repraesentaneus</i>	ムラサキイロガワリハツ			
128	<i>Lactarius chrysorrheus</i>	キチチタケ			
129	<i>Lactarius akahatsu</i>	アカハツ			
130	<i>Cantharellus infundibuliformis</i>	ミキイロウスタケ			
131	<i>Clavariadelphus ligula</i>	コスリコギタケ			
132	<i>Clavulina cristata</i>	カレエダタケ			

この例会の催しの一つ、きのこクイズの成績優秀者は次の方であった。

(最優秀賞) 加藤わせ、(優秀賞) 宮内信之助、(努力賞) 宮田繁・塚田哲丸

世話人の不手際で成績の発表と表彰を怠ったことをお詫びします。賞状とささやかな賞品を記念写真送付時にお送りします。

きのご西東

山手 万知子

ここ3~4年間に出版されたきのご関係の書籍で手持ちのものを紹介する。もれたものがあるかもしれないが、その際にはご連絡をいただければ、本屋に走ろうと思う。

内容に関してはどれもすばらしいものだが、いわゆるきのごの書物に対しての目が肥えてきた読者をどれだけひきつける内容や切り口が探せるかが、今後の課題になりそうだ。

1990

- 青森県きのご雑学散歩/成田伝蔵/東奥日報社 800
- キンダーブック10 きのご/高山 栄/フレーベル館 360
- 栃木のきのご/萩原基維/月刊さつき研究社 1,800
- 新版 青森県のきのご/成田伝蔵著 菅原光二写真/東奥日報社 2,300
- 石川県産 きのご検索図鑑/池田良幸著 本郷次雄監修/橋本確文堂企画出版室 1,500
- きのごの森の雑記帖/瀧口道弘/葦書房 1,854

1991

- 北海道きのご図鑑/高橋郁雄/亜璃西 2,800
- 傘の色で見分ける ザ・きのご/岩手県菌類研究同好会写真部/岩手日報社 1,800
- 小学館のフィールドガイドシリーズ10 きのご/菅原光二 小学館 1,800

- フィールドセクション きのご/成田傳蔵編集協力/北隆館 1,800
- 秋田きの図鑑/畠山陽一/無明舎出版 2,500
- しあわせなキノコ/伊沢正名・寮美千子/思索社 1,500

1992

- 山菜・きのご・木の実 フィールド日記/水野仲彦/山と溪谷社 2,000
- フィールド版 キノコの本/松川 仁/丸善株式会社 1,700
- 日本の毒キノコ150種/小山昇平著 本郷次雄監修 横山和正協力/ほおずき書籍株式会社 2,300
- 広島県のキノコ/比婆科学教育振興会・広島きのご同好会/中国新聞社 2,600
- 見分け方と食べ方 きのご入門/内田正宏・川嶋健市/主婦と生活社 1,200
- ポケット きのご/清水大典・伊沢正名/家の光協会 1,000
- 熊本のきのご/熊本きのご会編著 本郷次雄監修/熊本日日新聞社 2,500
- 夢自然 きのご1/山と溪谷社 1,200

1993

- 夢自然 きのご2 きのごの目利き/山と溪谷社 2,500
- きのご学放浪記/四手井淑子/海鳴社
- キノコとカビの生物学/原田幸雄 (中公新書1132) 680
- 小林路子画集 きのご/山と溪谷社 3,000
- biosphere (バイオスフェア) No. 1, No. 2, No. 3, No. 4, No. 5, No. 6/農村文化社 各 500
- キノコの化学・生化学/水野 卓・川合正充/学会出版センター
- きのご学/古川久彦編著/共立出版
- きのご中毒/山下 衛・古川久彦/共立出版 24,000

表紙によせて

チャヒメオニタケ

Cystoderma terreii (Berk q Br.) Harmajain

平編集委員 (以下, 平): えらいこっちゃ。どないしょう。

編集長 (以下, 長): なにを騒いどるのや。

平: いや, 表紙写真の持ち込みが全くあれへんかったんですわ。

長: 困ったな。

平: ほんまに困りましたな。

長: おまえの顔載せるか?

平: そんなんしたら, 事務局に“ふぁんれたー”の山がきて上田先生に迷惑かけますがな。

—白けた雰囲気は漂う—

長: あほ云うとらんと, なにか写真探せ。

平: ビンボケの写真しか持ってまへんで。

長: 何でもええから出せ。

平: へえ。

というやりとりがございまして, 表紙写真は1986年10月に滋賀県高島郡で撮影されたチャヒメオニタケです。

(撮影および文 田中千尋)

追伸: 編集委員会では表紙写真を募集しております。

「他の会」の会報より(1)……………事務局

本会は、国内の他のきのこの会と会報の交換をしています。最近送ってくださった会報の中にある、本会ではあまり取り上げられなかった呈色試薬の記事を簡単に紹介しようと思います。

それは、信州きのこの会会報「紅天狗」第2号に石藤健一氏がお書きになった《新たに試みた「きのこの同定試薬」考察》です。

まずパラジメチルアミノベンツアルデヒドの4% 1N 塩酸溶液での呈色反応のころみを紹介されています。この溶液は「エールリッヒ試薬」と呼ばれ、クロマトグラフ用の発色剤ですが、ひだや柄の表面に滴下することにより、きのこによって濃紫色～紫色～青色～淡青色、淡桃色～赤色、赤色～茶色などに変色するか、または無反応なのだそうです。ベニタケ類の区別に役立つか、と期待されています。

つぎに「ベネディクト試薬」が紹介されています。これはきのこに滴下するのではなく、この液で胞子を煮るのです。すると胞子の表面に銅の微粒子ができることがあり、それを顕微鏡で観察します。これは還元性の糖類の検出に使う試薬で、石藤氏は腹菌類の担子胞子で試されています。

呈色反応の原理と利用上の留意点も簡潔にまとめられており、呈色反応は傘の表面、柄の表面、肉、ひだ表面などの各部分で行う必要があると述べられています。

また、その他の試薬として次の様なものと、その原理が簡単に述べられています。

硝酸銀、塩化第二鉄、硫酸第一鉄、グアヤク、アニリン、 α -ナフトール、沃素液、レゾルシン、フェノールアニリン、濃硫酸、スルフォフォルモール。

試薬の選択と利用という項目では、同じ意味を持つ試薬を重複して使わずに、性質の異なるものを組合わせて使うべきだと指摘されています。

以上

*** 蛇 足 ***

試薬による呈色反応は、ヨーロッパではきのこの種の同定の手がかりによく利用されていると聞きますが、日本ではそれほどではありません。高価な薬品はあまり使いませんので、もっと利用したらどうでしょうか。ちなみに、パラジメチルアミノベンツアルデヒドは25gが900円でした。これだけあれば、ビールびん1本ほどのエールリッヒ試薬ができます。ただし、多くの試薬は一度にたくさん作っておくことができず、少量を度々作らなくてはなりません。古い試薬はさっさと捨てて面倒がらずに作り直すことです。そしてなるべく決まった条件(きのこの成熟度、鮮度など)と部位(傘、ひだ、柄、肉など)で使う必要があります。

しかし、残念なことに日本産のどのきのこが、どの試薬によって、どのような色になるのかを網羅した本はありません。こういうことを日本全国のきのこの会のメンバーが協力してやり遂げることは、大変価値のあることではないでしょうか。

談話会の皆様、頑張りましょう！

編集後記

今年のみなさんのきのこのとれぐあいはいかがでしたか。冷夏長雨の影響で米作りの方は大打撃を受けたのですが、きのこも冷害だったのでしょうか。みなさんの例年との比較した感想やデータがいただきたいと思えます。編集委員のメンバーの感想では、8月までは好調だったのに、それ以後はあまりきのこにおめにかからなかったという意見が多かったようです。

また、不幸にも名古屋などできのこによる死亡事故がありました。来年こそはそんなことがないように願いたいものです。

編集委員長

関西菌類談話会会報 No. 14

1993年12月15日 印刷

1993年12月15日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会

発行 関西菌類談話会

発行者 関西菌類談話会

事務局 〒567 大阪府茨木市春日2-1-2

大阪府立春日丘高等学校

上田 後穂方

振替 大阪 5-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入る